

りよ獄監浪放働勞

郎太謙藤後故



後藤謙太郎

目次

未知の同志え.....	一
鐵の窓より.....	三
鐵窓より歌ふ.....	八
石の牢屋より.....	一三
勞働者の歌.....	一六
死か狂か.....	二一
無題十種.....	三一

貧と病の生活より……………三六

病める労働者の歌……………五八

労働放浪監獄より……………六三

鑽よ血潮よ……………六六

スパイ……………六八

雪の線路を歩いて……………七一

闇に戦く……………七五

狂へる労働者の歌……………七八

文明病……………八二

工場隅より……………八四

小作人の叫び……………八七

小作人の歌……………八八

のろし火……………九〇

火の舞……………九二

探炭夫の歌……………九五

坑夫の歌……………九七

坑夫の言葉……………一〇一

どん底の生活より……………一一一

未知の同志へ

△いと遠きロシアの

革命主義者の、物語りを讀む夜の如く熱き涙をもてほの暗き牢獄の窓にわれは讀みしよ送り來し女の手紙

△もとより紙切れに忙しく書き連ねたる短かき消息にはあれども、その一字一句に涙なくして讀み辨べきや「只有合せの物を送りました」この未知の同志の妻の短かけれどもまごころもて書きし消息にたかぶれる囚人の瞳はうるみしよ
△われは未知の同志の職業も年合もはた顔かたちも知るよし

はなけれど、送り來し小包の——手拭と二冊の書物と使ひ古し鉛筆と原稿紙僅かばかりの封筒と切手——見てあまりに豊かならざる同志の生活を知る

△あ、陰鬱なる北國の都會の寒さと飢の生活に戦ける未知の同志よわれはこの陰鬱なる牢獄に引かれつゝも日本女性の輕卒なるを憤りし時君が妻のまごころの消息をきよて尙女性にもわれらの同志のあるを見たるよ

△あ、牢獄の窓は固く閉せど鐵の鎖は重くひゞけど未知の同志のかくもげなげにわが周圍にあるを思へばあゝ××もいとちかきが如し、未知の同志